

著者に聞く

「無残な光景がまるで花の撮影でもしたかのように美しく撮られていて、救われた。死者への思いやりだろうか」

呉市の大和ミュージアムで九日まで開かれている写真展「バラオ・海底に眠る証言者たち」。見た人からこんな感想が届いた。一日約千人の来場があり、どの人も群青色の世界に引き込まれる。「証言者たち」とは、一九四四年三月、米軍の大空襲でバラオの海に沈んだ艦船や航空機。本書は写真展に合わせて刊行された写真集で、著者がバラオ

「バラオ―海底の英霊たち」

歴史の「証人」に光

で撮り続けてきた水中写真の集大成だ。

世界の暖海を旅し、「療戦」があった。コシタなどやしの海中写真を切り取ってきた。それが一転、暗く濁った海に身を沈め、鋼鉄の残骸の中に潜り込むようになったのは二〇〇二年。レメンゲサウ・バラオ大統領の誘いだったが、その存在に気づかなかったことを恥じた。「観光客も私もボートで通り過ぎていた足元の海に痛ましい光景がありながら、知らなかった」と振り返る。

本書を開くと、半世紀余りの歳月で海底の銅塊は貝殻に覆われ、マストや迫撃砲などの傍らを魚やウミカメが泳ぐ。陸上にも墜落あ

田中正文さん



たなか・まさふみ 1959年千葉県市川市生まれ。大正大卒。出版社勤務などを経て93年から写真家として活動。

るいは不時着したと思われる「零式艦上戦闘機(ゼロ戦)」があった。コシタなどの草木に覆われていたのを捜し出し、地元州政府の許可を得てまるで墓掃除のようになり取り取って、機体の全容を記録に残した。

沈んだ艦船は燃料・兵器・食料などの輸送任務に当たった軍民の船が多い。「忘れられた無名の船と乗組員たちに光を当てる作業だった」と振り返り、文、地図、年表も付けた。また、「海中では空気に触れないため、陸上のようなさび方をしない。記録に残す価値がある」とも言う。

遺族にとつてはどのようなものでも遺品に等しい。昨年六月、地元の千葉県市川市で写真展を開いた時、沈没した工作艦「明石」の乗組員を父に持つ女性が海底の船の断片を指さし、「この写真をください」と言ったことが忘れられない。「そういう立場の人にしか分からない気持ち。それが少しは分かった」。今後は国内の沈没艦船にも潜る。

(並木書房・三九九〇円)
(佐田尾信作)